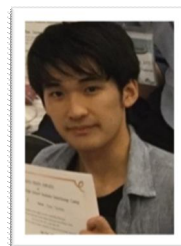


第24回「日韓高校生交流キャンプ」参加生徒の感想文 ③

「実体験だからこそ得られた貴重な経験」



井上 靖隆

本郷高等学校 2年

日韓高校生交流キャンプは5日間という短い期間であったが、他では決してできない非常に有意義な経験となった5日間であった。以下、「日韓関係」と「交流」に焦点を当てて今回の感想を書いていくが、その前に日韓関係史について振り返りたい。

水稲耕作・金属器・製鉄・機織・暦・馬術・漢字・仏教・儒教・墨・紙・彩色。

これらは全て、古墳時代（2世紀後半～7世紀末）までに朝鮮半島から日本に伝わったものである。古代日本の国家形成は朝鮮半島からの技術伝来がなければ史実とは大きく異なっていたであろう。盛んな文化交流が日本と朝鮮半島、主に百済・加羅地域と行われたことで、数多くの技術を吸収し、そこから日本独自の文化を生み出してきた。安全な航路が保障されず、正確な地図も、語学参考書もない時代にこれほど活発に交流が行われてきたのである。

そう考えると、日本と韓国は地理・文化の両面で近い関係であったと見ることができ。しかし、その後の大日本帝国による

植民地統治時代の35年間と戦後の疎遠感が日韓関係を大きく冷え込ませ、近年では領土問題や植民地時代の問題によって政治的に緊張した状態となっている。一方で日本国内では韓流ブームなど、日本国内でも韓国の文化が人気にもなったが、やはり政治的な問題が大きく報道されたことで、国内の対韓感情は良くないものとなってしまっており、韓国人に対しても否定的なイメージで語られてしまうこともある状況だ。

だが、こうした状況の原因は、盲目だからこそ創られた「虚像」ではないか、と私はこのキャンプに参加して感じた。

韓国人に初めて会ったときは非常に緊張したが、皆とてもフレンドリーで優しく、国の壁を感じることはたまに生じる「言葉の差」以外にはなかった。といっても私のグループは日本語が堪能な人が多く、男子部屋の共用語は日本語になっていたくらいである。まさかここまで韓国人が日本語や日本の文化に精通しているとは思わず、驚

かされた。

帰国後もグループ内の LINE で交流が続いているのだが、「LINE 通訳」なる物を利用すると、メッセージを打つと同時に翻訳されたものが表示される。異国交流最大の壁である「言葉の差」が崩れるのは人工知能の発達が著しい現在、もはや時間の問題なのかもしれない。しかし、さらに驚いたことには、韓国人がついに日本語を先に打ち込んでそれが韓国語に翻訳されているといったシュールな状況が起こっていることである。訳を見れば一目瞭然、後者の方が意思疎通を細かく行えることは当然であるが、そうでなくても意思疎通が行える現代は非常に便利な時代だと思う。

時折国内で語られる残念なイメージは、一部の事象のわずかな一面しか見なかったことによって生じた「虚像」以外の何物でもなかったのである。私は5日間の日程で韓国人と寝食を共にし、事業発表を行う中でそう感じた。

しかし、この経験は実際にこのキャンプに参加したからこそ得られたものであると思う。そのように考えると、何事も「見て・触れて・感じる」こと、すなわち実体験を経なければ正しい理解は得られないのでは

ないかと感じた。

この「見て・触れて・感じる」というのは私が所属する歴史研究部のモットーで、調査地を研究するに当たって、調査地を「見て」、調査地の事物に「触れて」、調査地そのものを「感じる」というものなのだが、これは国際交流をはじめ、さまざまなことに通じるものだと思う。この過程を5日間かけて韓国人とできたからこそ、相互に正しく理解し、日韓関係史についても話すことができるような関係を構築することができたのだろう。

現代には SNS をはじめとする交流するためのツールはたくさんあるが、実際に会って寝食を共にし、共同で何かを創り上げるような密度の高い交流には決して敵わないだろう。

関係者の皆さん、メンターさん、そしてなによりチームメイトの皆さん、貴重な経験をありがとうございました。このキャンプが今後も連綿と続き、より多くの学生が貴重な経験をすること、そして未来の日韓の共存共栄が確固たるものになっていくことを願っています。

「絆は永遠に」



金 由美 (キム・ユミ)
時至高等学校 2年

私の尊敬する多くの方々は、人生を変えるターニングポイントが何度か訪れてくるだろうが、その最初のターニングポイントは、おそらく高校時代であろう、と言っていた。私は「あまり良く分からないが、そのうち私にも来るだろう。」と、今まではほぼ聞き流して生きてきた。しかし、日韓高校生交流キャンプに参加してから、その方々の言いたかった言葉の意味が少し分かったような気がした。たぶん、遠い未来に誰からか私に、あなたのターニングポイントはいつ訪れたのですか、と聞かれるなら、高校時代だったと、それは、「日韓高校生交流キャンプ」だったと答えるだろう。

普段から日本についてたくさんの興味を持っていて、日本と関係のある様々な活動をしてみたいと思っていたけれど、なかなか参加する機会をもらえなかった。それは、私が日本生まれ日本育ちのため、活動の目的や参加資格から外れているからだった。その理由の正当性について、分からなくもないけれど、やはりさびしく感じてしまうのはどうしようもなかった。

こんな私でも参加できる活動はないのか、絶えずに探していたある日、日韓高校生交

流キャンプに出会えた。キャンプに応募するためには、自己紹介、エッセイ、推薦状など多くの書類が必要だった。私はエッセイを書くのにかなりの時間を費やしたと覚えている。キャンプに参加したいという強い気持ちとは裏腹に、当時は学校に提出しなければならない課題が山積していて、体力的に疲れていたもので、文書が上手くまとまらなかった。それでも、書いては消す作業を何度も繰り返した末、ようやくエッセイを完成することができた。そして、6月2日、ついに合格のお知らせが届いたあの時の喜びは言葉には表せないし、いまでも忘れられない。

キャンプに参加した初日、バスの中で私がキャンプに参加していることを実感した。隣に座っていた参加者と、交流キャンプ・日本・平昌(ピョンチャン)など色んなことについて話しているうちに、私の中にあっただ緊張感が少しずつ和らいでいった。

午後4時頃ホテルに着いて、韓国のチームメイトたちと軽く挨拶を交わしてから約1時間後に、日本の参加者たちが会場に到着した。その瞬間、私の心は、気まずさやぎこちなさではなく、嬉しさと期待感で溢

れていた。もちろん初めて顔を合わせたわけだから、気まずさやぎこちなさもあったけれど、それよりも日本の学生たちと早く仲良くなりたいという気持ちが断然勝っていた。

最初の日程、「友達作り」の時間を通して、ぎこちなかった雰囲気も徐々に和らぎ、チームメートたちも笑顔になっていた。そして、会話が弾むにつれ、私は自然と通訳として勤め始めた。韓国に帰ってきてからは、日本語を使う機会が少なくなり、単語や表現力の足りなさを痛感するまでそれほど長い時間はかからなかった。私の不完全な通訳のため、チームメートたちに被害を及ぼすのではないかと不安もあったけれど、少しでもみんなの力になりたくて、精一杯頑張った。

そして二日目、チームメートたちと一緒に平昌冬季オリンピックについての講演、大会施設見学、経済現場体験、それからクイズ大会のゴールデンベルまで、この日の日程の全てをこなしてから、チームのみんなと事業案について具体的な話し合いを始めた。この日は、チームメートと一緒に参加する活動が多い日だったため、みんなと様々なことについて話し合う時間も十分あったし、事業案を決定していく過程もずっと良い雰囲気のまま進んでいった。和気藹々とした雰囲気の中で行われた話し合いから、日本の学生と韓国の学生の考え方や事業へのアプローチの仕方が完全に異なっていることを実感しつつ、その違いは当たり前だと理解して受け止めながら、事業案

の大きな枠組みを完成させることができた。チームメート全員が一つの目標に向かってお互いの意見をすり合わせていく過程は、違いを受け止めて理解しようと努力するみんなの姿が見えた、とても新鮮な経験であり、非常に有意義な時間だった。

三日目は、事業内容を具体化していくなど、本格的な発表の準備を進めていった。この日はきっと徹夜になるだろう、とキャンプの先輩たちの感想文から覚悟はしていたが、やはり私たちも事業を具体化していくうちに朝を迎えてしまった。チームメート全員が、遅い時間まで一睡もせずに自分の役割を果たそうと精一杯頑張っていたから、相当疲れていたはずなのに、笑顔を忘れなかった。二日目に両国学生の考え方や事業へのアプローチの仕方が思った以上に大きいことに気付いてから、「上手くまとまらなかったらどうしよう」という不安が心の片隅にあったけれど、みんなの意見がまるでパズルのように段々と組み合わさっていくのを見ていると、言葉には表せない達成感や喜びが押し寄せてきた。

四日目、事業発表会でうちのチームは、日本学生が韓国語パートを、私は日本語パートを担当して発表を行った。キャンプのタイトルが「日韓高校生交流キャンプ」であるだけに、うちのチームは、「交流」という部分に重点を置くことにしたのだ。母国語のように流暢な発表にはならなかったけれど、私たちは自分の好きなお互いの国の言葉で大勢の観衆の前で事業案を発表する

という、特別な機会を持たたと同時に、言語の交流という目的を果たすことができた。結果、完璧でない発表だったかもしれないが、「Best performance 賞」を受賞した。

事業発表会が終わってからは、「ミニ・オリンピック大会」や「バーベキュー」を楽しみながら最後の夜を過ごした。

最終日、金浦空港近くのアウトレットで4泊5日という短い日程に幕を引き、すっかり仲良くなってしまった友達やメンターさんたち、キャンプ・スタッフさんたちとお別れして、各自それぞれの日常へと戻っていった。キャンプの全ての日程が終わると同時に私たちは離れ離れになってしまったが、今でも「LINE」でみんな繋がっているし、これからも交流を続けていくつもりだ。

今回のキャンプを通して、私は大きく3つのことに気が付いた。

一点目は、韓国人も日本人もみんな同じ人間であることだ。国籍も性別も年齢も、心を開いて接してみれば何の問題にもならない。理解や尊重は遠くにあるものではない。

く、私たち一人一人の小さな努力や思い遣りで簡単に生み出せるものなんだと改めて気付かされた。

二点目は、同じ目的を持っていれば、考え方が異なるとしても、それはお互いの足りないところを補ってくれるシナジー効果を生み出してくれるということだ。もし、キャンプを日本学生と韓国学生に分けて別々に進めたとしたら、事業案はきっと短編的でごく普通の内容にとどまってしまったのではないだろうか。

三点目は、自分の足りなさに気付いたことだ。自分の日本語の実力がかなり落ちているとの自覚はあったけれど、ここまでひどいとは思わなかった。日本語を流暢に話せる他の韓国の友達を見て、自分の怠慢さを深く反省した。

このように様々なことに気付かせてくれて、学ばせてくれた全ての方々に感謝申し上げると同時に、うちのチーム名である「絆」を繋いでいくためにもみんなで近いうちに再会できることを心から祈っている。キャンプの関係者の皆さま、メンターさんたち、日韓の参加者全員、本当にありがとうございました！

「一生の仲間」



吉田 さくら

高崎市立高崎経済大学附属高等学校 2年

今回私がこのキャンプに参加した理由は普段日本語しか使わない環境から離れて、自分の力で相手に気持ちを伝えてみたい、刺激を得たいと思ったからだ。また1番近い国である韓国で同世代の友達を作って日本のイメージを聞いてみたり、話してみたり、そういった国際交流に大きな期待を抱いていたからだ。

早速キャンプの応募用紙を手にしてからは絶対にこのキャンプに参加する！といった強い気持ちでいっぱいになり、間近に迫っていた定期テストの勉強を放り出してまで作文を書くことに熱中した。そういった過程を経て、手に入れたチャンスを無駄にしないと心に決め羽田空港に出発したのだ。

1日目、羽田空港に集合し、飛行機に乗り、人生初の韓国に足を降ろすまで私は緊張と期待が混ざり合ったよくわからないテンションだった。しかし、ホテルに到着し日本人学生を歓迎するアーチをくぐり抜け、韓国人学生と対面したときにこれから始まるんだと自覚しシャキッとした。

そしてすぐに自己紹介が始まったが、緊張で頭が真っ白になり沢山練習したはずの韓国語での自己紹介がカタコトになってしまった。それでも韓国の学生は笑顔で対応

してくれて、一生懸命内容を理解しようと努力してくれていたのが伝わってきた。その優しさは忘れないだろう。

2日目は平昌オリンピック組織委員会の方の講演会、オリンピックの施設見学、風力発電所の見学があり、1日中忙しかった。様々な現場に行き、現地の方の貴重な話を聞くことができ充実した内容であった。特に暴風雨で発電機が全く見えなくてみんなで笑ったのがとても印象に残っている。

本来ならマイナスに捉えられることも私のチームはそれをプラスに変えられた。みんな、そこでの一瞬、一瞬が笑顔だった。

3日目、この日は2日目で吸収したことをみんなで出し合い、発表内容の議論や構成、発表準備に1日中時間を使った。そこで私はチーム1人1人の力を実感し圧倒された。pptを作るのが得意な者、動画作り、英訳が得意な者、みんなで個性を出し合い、短い時間で1つの物を作り上げていく喜びを心、身体で感じる事ができた。言葉が通じなくて議論が熱くなること、意見がぶつかることもあったのだが、1番本気になれた瞬間だった。

4 日目の朝はギリギリまで準備をしていて身体の疲れを感じたが、それよりもここまでみんなで突っ走ることができて発表が楽しみで仕方なかった。

発表前に smile! と互いに緊張をほぐした。その時、全員が1つになった感覚を今でも覚えている。そこでわたしは、結果よりも何よりも大切なものを得たと確実に主張できる。

そして発表後のキャンプもミニ・オリンピックも全てを全力で楽しんだ。お腹が痛くなるまでみんなで笑った。

その日の夜は1つの部屋に集まってお世話になったメンターさんにサプライズを実行し、パーティーを開いた。明日で別れるという現実から逃げたくて、笑い疲れるまでみんなで語り合った。もうこのときには言語の違いなど一瞬も感じず、コミュニケーションをとっていた。時間などあっという間に過ぎてしまった。

5 日目、別れの時間になるまで私達は変わらず過ごしていたが、本当に別れとなった時に自然と涙が溢れてきた。止まらなかった。それでも、また絶対に全員で再会する。と強く誓いあった。この約束は一生忘れない。

今回のキャンプに参加して、今までの自分が見たことのない世界をみることができた。今も文章にできないくらい色々な感情でいっぱいだ。涙が溢れそうになる。

政治で対立していたって、なんだったって、ここで得た友情により、国が違っても分かり合えると確信した。いや、私達がこれからの日韓交流の架け橋になっていくだろう。

今もインターネットで連絡を取り合い、繋がっているのがとても幸せを感じる。私達の絆はどんどん深まるばかりだ。

最後に日韓キャンプを主催して下さったスタッフの方々、メンター、OBの皆さん、このような素敵な経験ができた場を設けてくださり、支えてくださり、ありがとうございました。

最高の仲間へ

みんなに出会えたこと、5 日間共に苦しみ、喜びを分かち合えたこと、これらの経験がわたしに一生の宝物と仲間を与えてくれました。

約束は忘れない、絶対に再会しよう！また会う日まで互いに成長しよう！

最高に楽しかったです。ありがとうございました。

